足羽川用水の歴史

用水奉行　戸田弥次兵衛 公

足羽川用水の始まりは、奈良時代（7 世紀頃）に開かれた荘園内の原始的な水路といわれ、足羽川から直接、各用水が取水し、渇水期は絶えず水争いが続いていました。

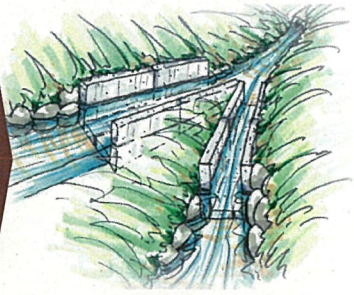
しかし、江戸時代宝永年間（1710 年頃）になると、用水奉行戸田弥次兵衛公により、複数の用水系統を統合する当時としては珍しい合口※1 のための堰の設置や、水路の分岐点に定石※2 を布設し、水争いを緩和するなど、現在の足羽川用水の礎を築いたといわれています。

※1　合口（ごうぐち）とは、それぞれ川から取り入れていた用水の取り入れ口を一つにまとめたもの。

※2　定石（じょうせき）とは、石板による水路。水路の幅等によって用水の配分を明確にしたもの。

（大和耕作絵抄より）

水争いの緩和



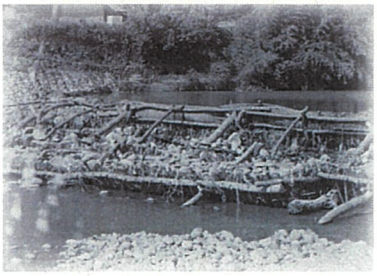
※2 「定石」イメージ図

足羽川頭首工の誕生

足羽川の堰堤は洪水のたびの修繕と不安定な取水量が争いの原因となり、さらに、曲がりくねった用水路の維持管理には多くの費用がかかっていました。

そのため足羽川に統合井堰の建設が叫ばれ、昭和 38 年 (1963)11 月に旧足羽川頭首工が完成。管理運営は、徳光用水・酒生用水・六条用水・足羽四ヶ用水・木田用水・社江守・足羽三ヶの各土地改良区が集まって足羽川堰堤土地改良区連合を発足し、頭首工等の維持管理等を行うこととなりました。

その後、50 年余りの経過とともに施設の老朽化が進み、平成 10 年度から新頭首工の建設をはじめ、20 年度に完成。現在の姿になりました。



統合以前の旧酒生用水の取水堰

旧足羽川頭首工

現在の足羽川頭首工